

この違った読み方をもっと自在にできるようになりたいと思うのだが、道はなお果てしなく遠い。

言語と私

會川 義寛

まだ小学生低学年の頃、私は、大人同士の會話を聞いてもさっぱり理解できなかったことを自分で不思議に感じていた。大人は私とは別の言語を話している様な気がしたものだ。特に大人の女の人同士の世間話はわからなかった。今にして思えばこれは、會話の背景がわからなかったこと、會話者の心情が理解できなかったこと、會話における語彙がわからなかったことにより、それらを総合した結果、同じ日本語を聞いているにもかかわらず何を話しているのか理解できなかったのだと思う。のちに小学校上級生になって、ませた女の子同士が大人の女の口調をまねて話しているのを聞いたときなどは実に嫌な気がしたことを憶えている。

次にわからなかったのは、小学校で習う唱歌の歌詞である。「霞か雲か」とか「夏は来ぬ」とかの歌詞はあとにして思えば文語であるが、これがわからなかったので、歌うときどうも不安定な気がしていた。私は自分に理解できない言葉を、たかが歌詞とはいえ、自分の言語として自分の口から発するのが、何か嘘をついている様な気がして嫌だった。「落つるよ落つるよ真白き流れ」などという歌詞が今でも時に口について出てくるが、考えてみればこれも変な歌詞だと思う。それとも私の記憶違いなのだろうか。「函谷関も物ならず」なども歌っていて内心、嘘つけ！と思ってしまう。

言葉に関して強く意識し始めたのは古文・漢文を習い始めた高校生になってからである。これはまづ内容が面白かった。古文で最初に何かの例として出て来た和歌は「心当てに折らばや折らむ初霜の置き感ほせる白菊の花」というものであったが、嘘にしても何とも奇妙な出鱈目を言うものだなあと強く印象に残った。漢文は簡潔な中に面白い逸話や感動的な文が多かった。先に興味ある内容の文があり、それを憶えて、そこから自分で言い廻しの法則などを見出し出して文法を考えるという順で學んでいた様に思う。

英語の方はもっと早く中学から習い始めていたのだが、こちらは私の心の奥にはあまり影響を与えなかった様に思う。心のどこかで所詮自分とは関係ないものと思っていたのだろう。その理由の一端はおそらく英語の教科書の内容が全く詰まらなかったことにあっただろうと思う。アメリカ中産階級の生活を標準にした様な題材が多かった様に記憶するが、そんなものに私は全く関心がなかった。今にして思えば、たとえば数学などを英語で教える教科書などがあれば面白かったのではないかと思う。

大學の第二外国語にドイツ語を選んだのは、おそらく若いときの勘違いで何となくドイツ語は學問に直結した言語の様な印象を持っていたためだと思う。今でも憶えているが、大賀小四郎先生がドイツ語の先生だった。先生は我々學生をととても愛してくれた。「文化とは何かということ君達はよくよく考えねばならない。それが君達エリートの義務だ」と強調された。そして福田恒存の「私の国語教室」という書を紹介して下さった。私は自分をエリートだとは思わなかったがすぐにこれを買って読んだ。それからである、私の假名遣いが不可逆的に変化してしまったのは（本稿は前後の文に合わせて誤假名遣いで書いています）。

しかしいづれにせよ私は語學は得意ではなかった。図書館に行ったら高校のときの柔道部の一年先輩の黒川真一さんが勉強していた。覗いてみたらロシア語である。「何を勉強しているのですか」と訊いたら、「ランダウ・リフシッ

ツの教科書だよ。原書で読んでもよくわかって面白いのだよ」と言う。これはとても敵わないと思った。

第3外国語の中国語とフランス語もものにならなかった。やれば出来る様になるという変な自信だけはついて、結局こんなものやっている暇はないと思ってやめてしまった。のちにスペイン語やイタリア語、トルコ語なども少し囁いたが、いつもその場限りである。しかしこれらの言語は必要になったらそれほど苦労せずにある程度はできる様になると今でも思っている。辞書と會話入門書は持っているからだ。

さて、30歳になってからである。これから留學する先のアメリカの大學の教授（テキサス大學のAllen J. Bard教授）に手紙を書いたのだが、その英語の原稿を父の友人で長らくアメリカの大學の教授をされていた先生（武澤信一教授）に見て頂いた。私としては細かい英語の言い廻しなどを直して貰おうと（今から思えば不遜にも）思っていたのである。ところが先生は私の手紙を一読して、この手紙に書かなければならないことはこれとこれとこれである。先方の教授に依頼しなければならないことはこれこれである。それが明確にわかる様に書かなければならない、と優しく教えて下さり、英語に関しては後廻しであった。そう言われたら確かにその手紙が何の用で何のために書こうとしているのかが自分の気持ちも含めて大変明晰になった気がした。だがそのときは先生に対して特に感謝するほどの気持ちにはならなかった。しかしその後このときのことを振り返ると、私の英語自体がひどかったであろうことはともかく、不明瞭な論理の文を漫然と書いていたこと、並びにそれに気付いてもいなかったことを、穴に入りたいほど恥づかしく思った。先生も、自分の大學の後輩が學位を取って母校の助手になっていながらこの程度の文章もまともに書けないのかと情けなく思われたことであろう。先生はもう亡くなられてしまった。この時の御指導に関する感謝の気持ちを先生に伝えることができなかったことを私は大変申し譯なく思っている。

総じて言えば、私は人に物が言えるほど語學を修得できなかった。また職業として英語を必要としているにもかかわらず未だに自信が持てる様になっていない。これは自分による自分に対する英語の教育・訓練をきちんと行なわなかったことによる。私の英語に関する私自身への要求はそれほど高いものではないのだ。英語の論文が明晰に書ければよいのである。これはきちんと訓練すれば必ずできる様になるものだ。それを行なわなかったのは、もっと他の分野の勉強をしたかったのだらうと過去の自分を弁解したくなる。

余り必要性を感じない会話の上達はとっくにあきらめている。英会話は今程度でよいから、他の言語の会話がもう少し出来れば嬉しい。